

協同制作による国際交流学習のための単元モデルの開発

Development of a model plan for inter-national collaborative learning by joint production activities

○稲垣 忠*、清水 和久**、塩飽 隆子***

Tadashi Inagaki*、Kazuhiisa Shimizu**、Atsuko Shiwaku***

東北学院大学教養学部*、石川県教育センター**、ジャパンアートマイル***

Faculty of Liberal Arts, Tohoku-Gakuin University*

Ishikawa Prefectural Institute for Education Research and In-Service Training**

Japan Art Mile***

要約：国際交流学習を実施するには、双方の活動計画、テーマ等の調整が必要である。本研究では、壁画の協同制作を取り入れた国際交流プロジェクト「アートマイル」に参加した教師を対象に、実施科目、活動の流れ、学習目標等を調査した。その結果、協同制作を軸にした国際交流のための単元モデルを開発することができた。

キーワード：国際交流学習 協同制作 アートマイル 単元モデル

1. 背景

国際交流学習は、インターネットが学校現場に導入された 90 年代半ばあたりからネットワークを用いた新たな学習方法としてその可能性が検証されてきた。近年では ICT 環境の整備が進むにつれ、技術面のハードルは確実に低くなり、教室から即座に海外の学校とコミュニケーションをとることも難しいことではなくなりつつある。

ところが実際に国際交流を学習活動に取り入れるには、相手校探し、交流時期の調整、既存の学校カリキュラムとの調整など、多くの課題がある。遠隔の学校との交流を授業に取り入れるための理論的な支援として、いくつかのガイダンスや授業設計モデルが開発されている。Harris (1999) による 6 種類の交流モデルや、Riel (1995) による Learning Circles と呼ばれる 6 ステップからなる異文化理解のためのプロジェクト、Kageto (2006) によるコミュニケーション力の育成モデルなどが挙げられる。稲垣ら(2006) による学校間交流学習の授業設計モデルでは、活動理論を前提にした枠組みモデルと 10 ステップからなる学習環境デザインのための手順モデルを示している。

国際交流で取り組まれる活動内容には、お互いの文化の紹介、物や作品の交換、ディベートなどさまざまなスタイルがあるが、本研究では、協同

の制作活動に着目する。これまで、協同のプレゼンテーションイベントを企画運営する影戸(2001) や相手の国の文化を反映された劇を演じる田中(2002)など先進的な実践が試みられてきた。ただし、前述の一般の交流学習の理論との関連性を検証したものや、小中学校の段階で既存の教科、時間の枠組みの中に位置づけられる普及レベルまで明確化されたモデルは示されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「アートマイル」と呼ばれる壁画の協同制作のプロジェクトにおける標準的な単元モデルを開発することにある。アートマイルでは、クラス内、国内、海外の学校の子どもたちと協同で壁画を制作することが学習活動上のゴールである。その過程でお互いの文化を理解したり、協同で発信するメッセージを考えるためにコミュニケーションを重ねていく。

このような協同制作を実現するためには、一般的な情報交換のための交流以上の密なコラボレーションが要求される。例えば、子どもたちは共通のテーマ、役割分担、お互いの進行状況といったことを共通理解しながら活動を進めることが求められる。子どもたちの学習活動に対し、教師はど

のようにして時間を確保し、単元的设计を行い、学習目標を位置づけていったのかを、2006年度の実施状況に対する調査結果をもとに分析した。その結果、協同制作を核とした国際交流学習の単元モデルを提案することとなった。

3. 方法

3.1 アートマイルプロジェクトの概要

アートマイルとは、壁画の制作とその展示を通して世界平和のメッセージを発信する国際的なプロジェクトである。ユネスコの「世界の子どものための非暴力と平和の文化10年」として認定を受け、「子どもの権利」をはじめとして国連のさまざまなプロジェクトと連携して活動を進めている (Foundation Culture of Peace, 2005)。このプロジェクトの日本版であるジャパン・アートマイル(以下 JAM と略す) では、壁画の制作プロセスに他校、海外の学校との ICT を活用した交流学习の実施を呼びかけていることを特徴としている。

本プロジェクトの目標は次の2点である。

1. 相互理解と文化の多様性を学ぶ: テレビ会議、掲示板など ICT による交流を通して、海外の子どもたちとの相互理解を図る。そして、壁画制作の情報交換の中からお互いの文化について学習する。
2. 自律的・主体的に学ぶ態度: 子どもたちは壁画のテーマを自分たちで決め、協同して壁画を制作するための分担をグループや交流相手と話し合いながら進めていく。

JAM では3種類の活動方法を提案している。2006年度には、国内からは17校20学級が、海外からは8学級が参加した。その結果、18の壁画が作成された(表1・図1)。

3.2 分析の手順

制作活動が終了した後、参加学級の担当教員に対し、評価シートへの記入を依頼した。評価シートには、参加学級の基本情報、学習活動の流れ、学習目標と達成状況、アートマイルのプロジェクトを実施する上での問題点や要望などの項目が含まれる(図2)。

表1 2006年度参加校

類型	地域	年齢	作品テーマ
SH	長野	15	アジア～私たちの未来
SH	兵庫	10	きみのためにできること
SH	兵庫	11	ふるさと
SH	兵庫	10	越知谷の民話
SH	熊本	12	熊本とアジアの未来
SH	熊本	9	アジア～私たちの未来
SH	熊本	10-12	アジア～私たちの未来
CD	熊本	11	戦争のない平和な未来
CD	熊本	11	みどりいっぱい未来
SH	佐賀	12	ふるさと アジアの宝物
SH	大阪	9,10	アジア～私たちの未来
SH	兵庫	16	Graves in Uzbekistan
SH	愛知	19,20	私たちの望む未来
CO	兵庫	13-15	シリアと日本のお祭り
CO	シリア	13-15	シリアと日本のお祭り
CO	大阪	13-15	A World Map with Many Faces
CO	シリア	13-15	シリアと日本のお祭り
CO	石川	12	伝統的なデザイン
CO	シリア	13-15	シリアと日本のお祭り
CO	石川	12	伝統的な暮らし
CO	シリア	8,10-12	シリアと日本のお祭り
CO	石川	12	伝統的な遊び
CO	シリア	10-12	シリアと日本のお祭り
CO	石川	12	共に未来に生きる地球家族
CO	台湾	10-12	台湾と日本のお祭り
CO	岡山	10	伝統的な食べ物
CO	エジプト	10	(作品完成は2007年度)

SH: 単独制作 CD: 国内交流 CO: 国際交流



図1 壁画の制作例

(上: 熊本の小学生の国内交流 下: 兵庫とシリアの中学生)

2006年度のアートマイルプロジェクトに参加した15人の教員から評価シートを収集することができた。シートの分析手順は次の通りである。

アートマイル 交流プロジェクト 評価シート

■基本情報について教えてください。

学校名 []	担当教諭 []	
児童生徒の学年・参加人数 (複数学年であれば学年別) [] 年 [] 名 [] 年 [] 名 []		
実施期間: 年 [] 月 [] 月 []		
交流相手: 国名 [] 学校名 [] 学年 [] 担当教諭 []		
実施教科・時数 (関連させたものをすべて)	単元名	時数

■主な活動の流れを教えてください。

時期	活動内容	児童生徒の反応	実施教科
	以下は典型的な流れです。加筆・修正してください。 (1)テーマへの導入 (2)企画検討 (3)制作 (4)鑑賞・振り返り		

■設定した学習目標と得られた成果について教えてください。(空欄箇所は先生が設定した目標をご記入下さい)
(5: とても身に付いた 4: 身に付いた 3: どちらともいえない 2: あまり身に付かなかった 1: まったく関連がなかった)

つきたい力・指導目標	実感	手立て	評価方法
	5・4・3・2・1		
	5・4・3・2・1		
コミュニケーション力	5・4・3・2・1		
情報活用能力	5・4・3・2・1		
学習を追究する意欲	5・4・3・2・1		
人と関わる力	5・4・3・2・1		
異文化・自文化の理解	5・4・3・2・1		
協同作業をする力	5・4・3・2・1		

■今回の取り組みの成果と課題はズバリどういった点でしょうか?

成果	課題

■その他ご感想・アートマイルプロジェクトへの要望などありましたらどうぞ。

--

図2 評価シート

1. 基本情報からは、アートマイルの実施教科と必要な授業時数の傾向を分析した。
2. 学習目標とその達成状況からは、どのような学習目標を教師が設定し、どういった目標が十分に達成可能だったのかを確認した。
3. 学習活動の流れの項目から共通する学習活動を抜き出し、目標、科目、期間等を考慮した国際交流による協同制作の単元モデルを開発した。

なお、調査対象には単独制作、国内交流を含めているが、本研究が対象とする国際交流による協同制作の特性を他の実施方法と比較検討することで明確化することを意図している。

4. 結果

4.1 実施科目と活動期間

表2は参加学級ごとの実施科目と時間数を集計したものである。さまざまな科目がアートマイルの実施に充てられているが、特に総合的な学習の時間と美術(図画工作)が主要な実施科目であることがわかる。その他に国語・英語といった言語科目や、社会科が交流の活動場面や内容理解として結びつけられている。また、実際には壁画の制作時間を補うために課外の時間も多く割り当てら

れている。科目の組み合わせの傾向には、総合的な学習の時間中心(IS)、総合と科目とのクロスカリキュラム(CS)、美術・図画工作中心(AT)、課外(OC)の4つのタイプが認められる。

プロジェクトの遂行に必要な時間数では、最短で12時間、最長86時間、平均は28.9時間であった。他校との交流を考慮すると、平均27.0時間が交流しない場合であり、30.8時間が交流ありの場合であった。

表2 参加校ごとの実施科目と時間数

No.	タイプ	総合的な学習	美術・図画工作	国語	社会科	道徳	英語	学校行事	課外	学級活動	クラブ活動	合計
1	IS	80	4								2	86
2	IS	50	10	18	2	2	3					85
3	IS	30										30
4	IS	15										15
5												
6	CS	12		9								21
7												
8	CS	10	8									18
9	CS	6	4									10
10	CS	6	6	2				6				20
11	AT		10									10
12	AT		8						12			20
13	OC								10	10		20
14	OC								12			12
合計		209	46	31	4	2	3	6	34	2	10	347

IS:総合中心、CS:総合と教科のクロス
AT:美術・図工中心、OC:課外活動

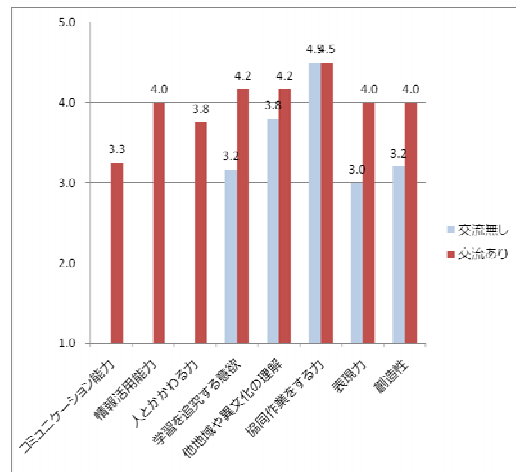


図3 学習目標と達成状況

4. 2 学習目標と達成状況

評価シートの学習目標と達成状況を調査した項目では、稲垣ら(2006)のモデルをもとに、コミュニケーション能力、情報活用能力、学習を追究する意欲、人とかかわる力、他地域・異文化の理解、協同活動のスキルの6つと、制作に関わる表現力、創造性を加えた計8項目を設定した。ただし、交流をしていない学級では省略した項目がある。また、参加教員は独自の学習目標を付け足している例も見られたが、上記8項目に再分類して集計を行った。

図3に示した結果からは、協同作業の力を除いて、すべての項目で交流学习ありの学級の方が交流無しの学級よりも高い成果が得られたと教員は自己評価しており、特に学習意欲と表現力の部分でその差は顕著である。

4. 3 協同制作を取り入れた単元モデルの開発

評価シートに記入された学習活動の流れと前節までの結果をもとに、国際交流を取り入れたアートマイルの単元モデルを開発した(紙幅の制限により当日配布)。小学校高学年の総合的な学習の時間を対象とした50時間程度のモデルである。交流相手は台湾を想定している。モデル単元の特徴は以下の通りである。

- a) 総合的な学習の時間を中心に、図画工作、社会科、国語科、英語活動の組み合わせ方を示している。
- b) 日本と台湾では学年暦が異なるため、日本では夏休み前に情報収集と自分たちを紹介するビデオレターづくりなどの活動からはじめ、9月以降から交流がはじまる構成とした。必要なコミュニケーション、ICTスキルを交流前に事前にトレーニングすることができる。
- c) 交流相手との「親善大使」役のぬいぐるみ交換を取り入れた。送り合ったぬいぐるみの立場で自分たちの日常生活を日記にまとめて交換することで生活文化の交流と仲間意識の形成を図る。
- d) 相手校が壁画の分担部分を制作している間、日本の子どもたちは、それまでの交流活動を振り返り、完成した作品について意見交換を

するところを単元の終末とした。

5. 考察

本研究では、アートマイルプロジェクトに参加した学校の担当教員を対象に、授業の振り返りと学習成果の評価を行う評価シートへの記入を依頼した。その結果、実施科目、時間数、学習目標についていくつかの傾向を明らかにすることができた。また、その結果をもとに、国際交流学习における協同制作を取り入れた単元モデルの開発を行った。

2007年度に本プロジェクトに参加する教員にモデルを提示し、それをもとに各校で独自の単元を展開できるよう支援をはじめている。

参考文献

- Foundation Culture of Peace (2005), Civil Society report at midpoint of the Culture of Peace Decade, Foundation Culture of Peace, World Report on the Culture of Peace, Barcelona, Spain, Copiespimpam, pp.9-10
- Harris, J. (1999), First steps to telecollaboration, Learning and Leading With Technology, 27(3), 54-57
- 稲垣忠・内垣戸貴之・黒上晴夫(2006), 学校間交流学习のための授業設計モデルの開発, 日本教育工学雑誌 30(2), pp.103-112
- 影戸誠(2001), 翼をもったインターネット国際交流マニュアル—あたらしい英語教育・あたらしいインターネット, 日本文教出版
- Kageto, M. (2006), How to improve students' communication competence through international exchange activities, ICOME2006, July 18-20, 2006, Tokyo Japan, pp.207-215
- Riel, M. (1995), Cross-classroom collaboration in global learning circles, In Susan Leigh Star, (Ed), The Cultures of Computing (pp. 219-242), Oxford Blackwell Publishers
- 田中龍三(2002), マルチメディア通信を用いた国際共同学習の実践—イギリス姉妹校との共同プロジェクト, 田中博之編, 総合学習のカリキュラムデザイン6 共同交流型カリキュラムを創る, 明治図書, pp.123-146